

小林隆児， 皿田洋子

強迫現象とその回復過程からみた前思春期発達

児童青年精神医学とその近接領域 33 (2) ; 163—176 (1992)

〈原 著〉

小林隆児*, 皿田洋子**

強迫現象とその回復過程からみた前思春期発達

児童青年精神医学とその近接領域 33 (2); 163—176 (1992)

11歳時にごみ収集癖という強迫現象を呈した女児例の治療を通して、前思春期発達の進展の様相を検討した。個人療法と並行して行われた家族面接の中で前思春期の発達を阻害していた要因が明らかになった。家父長制の強い大家族の家長であった祖父の死によってそれまでの家族内力動が大きく変化したことが患児の発症に強く関与していた。強い結びつきのあった祖父の死によってもたらされた対象喪失に伴う抑うつ不安が患児の発症を引き起こしたと考えられたが、その背景には、両親が祖父の支配によって親としての同一性を獲得することが困難であったことが関連していた。治療経過の中で、患児の前思春期発達の進展は両親が親としての同一性を獲得していく過程と密接に関連して展開していった。最後に前思春期にみられる精神病理現象を呈する症例に対して、家族全体を視野に入れた治療的工夫とその意義についても論及した。

Key words: pre-adolescence, obsession, perimenarche syndrome, family therapy

I. はじめに

昨今の思春期の精神医学的問題は、思春期の遷延化(笠原, 1976)とともに若年者の身体の早熟化現象にともなっていて多様化の様相を呈してきている。心身の発達のずれの増大は思春期の入口にさしかかっている子どもたちの精神発達にも深刻な問題を投げかけている(北村, 1991)。実際、臨床現場ではこの時期の子どもたちの中に心身にさまざまな不調を呈する例が増加している印象は否めない(郭・川田, 1983)。筆者ら(小林・今地, 1981; Ushijima & Kobayashi, 1988; 小林・牛島, 1989a, 1989b; 小林, 1991)はこのような観点から前思春期のさまざまな精神病理現象を呈した自験例を通して、思春期の到来を前にした前思春期にいかなる問題がその発達を阻害しているか、治療を通して今日の思春期発達の様相の特徴がいかなるものかを明らかにしようと試みてきた。

今回呈示する症例は前思春期に強迫症状を呈した女児例で、遊戯療法と家族面接によって治

療終結に至ったものである。本症例は今まで検討してきた前思春期発達の問題を端的に表し、かつその阻害的要因と治療の際の治癒機転などが明確に捉えられたので治療経過を振り返りながらこれらの諸問題を検討したい。

II. 症例提示

T子 初診時10歳(小学5年)

【主訴】ごみが大切な物に思えて捨てられない。そのため外出もできない。

【家族背景】父方祖母、両親、T子と弟(8歳、小学2年)の3世代同居の5人家族。祖父は初診の3カ月前に死亡した。大都市近郊のベッドタウンに住むが、そこは昔ながらの旧態然たる農村集落の面影を色濃く残している地域である。小学校は全校生徒わずか200人あまりの小規模校で、お互いに顔見知りでまだ共同体意識が強く残存している。

父は技術者。祖母は父を溺愛したらしく、そのためもあってか父は幼児期人見知りかひどくいつも祖母の背中に隠れているような子だった。祖父は孫のT子や弟をととても可愛がったが、とりわけT子は可愛がられていたという。母は結

* 大分大学教育学部

** 福岡大学医学部精神医学教室

婚してからは周囲に過度なほどに配慮的で、祖父母のケアを献身的に行ってきた。

【生育史】胎生期、周産期ともに正常。母乳のみで育ち、1歳3カ月と離乳は遅かった。非常に人見知りの強い子で、排泄の自立も遅く、外出時しばらくおしめをつけていた。夜尿はなかったが、自分からなかなかおしっこを言えず、おしっこは悪いことだと感じていたからと後にT子は自ら述懐している。夜驚があったり、風邪を引きやすい体質で、病院に毎月1～2回通っていた。幼稚園と小学校の低学年まで登園拒否や登校拒否がよくみられた。入学前までとてもことば使いが丁寧であった。その後少しずつ乱暴なことばを使うようにはなった。もの静かで一人で絵を描いたり絵本を見て楽しむことが多く、消極的で繊細な一面のある子だった。しかし、いつも母の態度に敏感に反応し、母が忙しそうにしていると登校を渋った。どこかに行こうとは自分から決して言わないが、いざどこかに行くと面白くなって帰りたいがらないなど、欲求を素直に出せない子だった。

【現病歴】小学5年の5月、T子が慕っていた祖父が白血病で倒れ入院した。そのため母は看病に手を取られ、夏休みになっても同様な状態が続いたため、T子は1日中弟と2人で留守番し淋しそうにしていた。祖父は8月中旬に死亡。T子は臨死場面にも立ち会い、火葬場にも嫌々ながら行って遺骨も拾った。四十九日の法要の直後の9月末、今度は父が遊び先でテニスの最中にアキレス腱を切断し入院となった。母は再び看病に追われるようになった。ある日T子は父の見舞いに出かけたが、その時はいていたスカートに付着していたごみが大切な物に思われて気になったため、ポケットに仕舞い込んだ。以来衣服に付着したごみが気になりだして、目につくごみはみんな仕舞い込まないと安心出来なくなってきた。ごみがみんな自分にとって大切できれいな物に思えるという。ごみにまつわる強迫行為は次々にエスカレートし、学校の給食の残飯、ごみ類すべて気になり、授業中も周囲のごみが気になって授業に集中できなくなっ

た。元来、幼児期から物を大切にすることができたが、今では給食の残飯も捨てることができずに、家に持ち帰るほどになった。手垢でさえ落ちてしまうのが心配になり、寒くもないのに1日中手袋をはめていた。風呂に入ると皮膚の垢が洗い流されるのが怖くて入れなくなり、爪を切るのも怖かった。外出しようにも大切なごみをどこかに落としてしまわないかと気になり、どこにも行けないという制縛状態に陥った。ごみはすべて自分の分身のような気になるらしく、ごみを捨てる捨てないを巡って家庭内は大混乱に陥っていった。

食事時に祖父が座っていた席にご飯をついでやり話しかけるような仕草までしていた。祖母が祖父の死を分からせようとすると、祖母を冷たい人だと激しく非難し、ごみ騒動の時には祖父が自分を助けに来てくれるものと信じ込んでいるという。

市内の育児相談を通して当科にて治療が開始された。治療はT子の個人療法を心理療法士皿田が担当し、家族との同時並行面接を精神科医小林が担当した。以後週1回1時間の面接を定期的に行うことになった。

【初診時の所見】身長131cm、体重26kg。小柄な女兒。11月とはいえ寒くもないのに手袋をはめて身構えている。緊張した表情であるが、懸命にこちらの質問に答えようと努力している。症状については抵抗なく具体的に話す。ごみを自分の分身のようにととても大切な生命体であると思ひますアニミズム的思考の水準へと退行し、祖父の再生願望を始めとした空想傾向が強い。しかし、他の面では現実検討は保たれており、支持的接近をする限りひどい混乱を起こさない。元来神経質な子どもで、分離不安や兄弟葛藤も強い。初潮はまだでその他の身体の第二次性徴も認められない。強迫症状のため採血は困難であった。

III. 治療経過

【第1期】治療導入期（第1回～第4回）

強迫症状がありながらも通院ができていた時

期である。

家庭でごみを巡る母子間のコミュニケーションが繰り返られるようになった。父や祖母はT子の行動を非難するため家庭内の混乱を助長させやすいが、母は常にT子に支持的に接するため、母への依存はますます強まっていった。入浴、歯磨き、食器洗いに至るまで何か洗い落とされることへの不安が強まり、日常生活全般にわたって支障を来すようになった。T子は強迫症状をもって母を振り回すようになり、弟に対する攻撃が目に見えるほどに激しくなってきた。

(第1回) T子は最初治療への導入に抵抗を示した。箱庭を勧めたが、手袋を決して放さず、人形や遊具を自分の手に取ろうとせず、かといって治療者にとっても強いためらいを示していた。

(第2回) 発症の誘因と思われるエピソードが語られた。小学校1年時、道具箱の中の名札を学校で紛失し、その時は見つからなかったので放置していたが、5年になってその道具箱を全員が持ってくるように言われたので、持って行ったところ、教室の床にその名札が落ちていた。その名札は誰かが箱に仕舞い込んでいて今になって捨てたから出てきたのだらうと思ったというのだった。また、祖父の火葬の時母は嫌がる自分を無理に居させながら、自分だけ他の用事で先に立ち去ってしまい、迎えに来てくれなかったという祖父の葬儀の時の辛い体験を語った。遺骨も箱が小さく沢山入らなかったのを父に注文をつけたが、残りの遺骨と灰は裏山に捨てると父に言われて悲しい思いをしたとも語った。

(第4回) 来院時、祖父の写真を大切に持ち歩き、その裏には傘マークで祖父と自分の名前を並記して誇示し、祖父に対する強い結びつきがうかがわれた。

個人療法の最後にいつも心理療法士はビニール袋を渡して、病院で見つけたごみを入れて持ち帰らせるようにしたが、それがT子には安心感を与えた。

【第2期】制縛状態期 (第5回～第9回)

強迫症状悪化による制縛状態のために外出することが極めて困難になり、T子は来院できないことが多かった時期である。

(第7回) 医師の勧めで父親が来院し、初めての両親面接。T子が小学5年生の5月頃から、それまで一緒にしていた入浴を嫌がるようになったことや、その頃めそめそし始めたことに父は気付いていたというが、その意味を理解できず困惑していることがありありとうかがわれた。父の戸惑いとは対照的に、母は娘の自分に対する態度がこの頃敵意に満ちたものから救いを求めるような依存的なものへと変化してきたことを嬉しそうに語るのだった。

(第8回) 弟に対して殺してやりたいほどの強い兄弟葛藤や、第二性徴が遅れているための自分の容姿への劣等感と人前で自分の良いところを見せたいが自分を出すのは怖いといった自己愛の傷つき易さ、いつも100点を取らないと気が済まないといった完全癖などが個人療法の中で明らかになってきた。家庭では弟に対する嫉妬がますますエスカレートしてきた。弟が自分より大きくなりほしくないかと語り、自分の身体に対する劣等感が強く感じられた。

(第9回) この2週間、朝起きられなくなり、無意欲になり、布団の中からはなかなか出れず、不登校気味になってきた。家ではますますかんしゃくがひどくなっていった。

【第3期】車中面接期 (第10回～第15回)

家族内の危機的状況は極度に達し、通院も困難になってきたが、治療者のすすめによって母は祖母と2人でT子を車に押し込み、自ら初めて車を運転して病院に連れてくるという実力行使に出た。T子は車の中から一歩も出ることができないためしばらく車中で面接するという異常事態が続いたが、この日の母の一大決心によって治療は大きな転機を迎えた。

(第10回～第12回) 車中での面接では心理療法士を自分の隣に座らせず、前の席に座らせてしゃべり続けた。家庭内での祖父母の関係が対立的であったこと、現在では父と祖母との関係も対

立的になり、祖母はT子に愚痴っているなど家庭内の様子を克明に語った。次第に大家族の中で繰り広げられる家族成員間の対立関係とそれに巻き込まれているT子の姿が浮き彫りになってきた。

(第13回)治療開始後3カ月経過したこの頃から第二性徴の発来を示す乳房の膨らみが開始し、T子は毎日ように胸を触って大きくなったことを母に誇示しながら、共に喜び合うようになった。おしゃれにも関心を示し始め、髪を飾りたがるようになった。ごみに関する不安が起ってきても、母にまじないをかけてもらうだけで安心できるようになった。強迫症状も次第に緩和、制縛状態を脱して、登校が可能になった。

この回に母は自分の幼児期の母子関係について初めて回想して語った。それによると、幼児期は手がかからず、自分の母の指示に従順だったが、登園拒否や登校拒否があり、母が忙しくしているとひどくなっていたなど、娘と同様に母自身にも自分の母への依存を巡る葛藤が大きかったことがうかがわれた。

T子は前述したような大家族の中で繰り広げられる人間ドラマの様相を話した後に、寝室での家族のやりとりを話し、「(父とは)一緒に寝たことはあるけど、小学5年生になって気持ちが悪くなってきた。(父が自分を)抱き締めたりするからもう絶対に一緒に寝ないようになった」こと、その契機になったのは「小学5年の時、お父さんがエッチなことをしたから。お風呂に入っている時、自分のお尻を触った。洗ってやると言っ。お父さんの手がぬるぬるして気持ち悪かった」というのであった。

このセッションを契機に、T子の強迫症状は目に見えて消退し始めた。

(第14回)家庭内の混乱がかなり鎮静化していった。母は面接の中で、T子の育児に関するさまざまな問題を語れるようになった。家庭内で祖父母が絶大な権力を持ち、育児についても祖母の方針が絶対的で、母は今日まで一貫して祖母の方針に従いじっと耐えてきたが、そんな不自然さを友人に指摘され注意されたこともあった

らしい。しかし、祖父の死後、母は祖母に反抗して自分の意見を言い始めたという。

(第15回)T子は外でのびのびと遊ぶようになり、今まで攻撃的であった弟と一緒に鶏と戯れて遊ぶようになってきた。自分に振り回されている母に「お母さんは大変ね」と同情するなど、T子の母親イメージが変化してきたことがうかがわれ、母を思いやる態度さえみられるようになってきた。しかし、外出先でトイレに入れない状態はまだ続き、排泄にまつわる不安はこの時期にはまだ解消されていなかった。個人療法場面では第二性徴によって膨らんだ乳房を心理療法士に誇示するのだった。

【第4期】治療室内面接期(第16回～第30回)

6年生の新学期を控えて、それまで車中ではかできなかった面接が院内の治療室で行えるようになってきた。

(第16回)個人療法では、症状が軽快していることは認めるが、「(症状が)なくなって平気になるのが怖い」と治療関係が切れることへの不安を語った。現在一番大切なのは「(自宅に飼っている鶏の)コッコ」だと述べ、過渡対象が現在のT子には大きな役割を果たしていた。また幼児期、「3歳頃まで、オシッコをもらしてはお祖父ちゃんに怒られていて」、尿意を親に告げることが何か悪いことのように感じていたというのだった。(第17回)父が自発的に参加し、2回目の両親合同面接。この時期の娘の心理をどのように考えたらよいかを父と一緒に考えるように面接を進めていった。5年になって自分から少し遠ざかったT子に対して父はなんとか機嫌をとろうと、滑稽な仕草でスキンシップを持つように心がけたという。それまで自分はあまりにも型にはまりすぎた態度を取っていた。それは祖父の影響が大きかった。祖父があまりにも厳格であったため、子どもの頃から甘えたこともなく、祖父とは祖母を通じてしか話せないような存在であったと自分の幼児期を回想するのだった。医師はこの時期の親の役割について助言を行いながら、両親間でのコミュニケーションを促進するように双方に働きかけると、父の話に対して、母は

初めて「こんな夫だから、何か相談しようと思っても、すぐにやめようという気になり」、夫婦間での感情交流が今までほとんど持てなかった、とはっきり父を批判した。そのことばには母としての自信を感じさせるものがあった。このような夫婦の交流が芽生えてから家庭ではT子の父への警戒心が薄れ、父の禿頭をからかうようにして父とじゃれ合うようになっていった。両親とT子との間には今までにない生き生きとした交流がみられ始めた。

(第18回) T子は治療開始後初めて風呂に入って手を直接湯につけられるようになった。自分の容姿を盛んに気にし始め、リボンを欲しがり、それを使って髪の手入りに熱中するなど自己愛の高まりが強く感じられるようになった。

母は面接の中で、父は物を買うことに禁欲的で、子どもに自分が何かを買ってやろうと思っても、父がそれは必要がないとしてすぐに拒否してしまっていたこと、そのため子どもは2人とも非常に禁欲的になり、何か欲しい物を買いたい時はいつも父の顔色をうかがっていたこと、こうした姿は父が祖父に対してとっていた態度とも酷似していたという。

4月になって、急に「おむつ」(生理用ナプキンの意でT子は使用していた)を欲しがるようになった。それを母に買ってもらって大事な宝物を得たように歓喜していた。

個人療法でT子は、祖母が自分に優しくなり、よく泣き、動物までも可愛がりだした最近の変化を取り上げ、家庭内の核家族の形成が祖母に何らかの影響を及ぼしたことが推測された。

(第19回～第24回) T子はまだ攻撃性の表出が激しかったが、母はゆとりをもって対処していたためT子の攻撃性は中和されていった。T子は自分が大切にしている持ち物を自由に持ち運びできるようになり、車の中から持ち出しては治療の中で自作の人形を使って性的な関心の強さを思わせるごっこ遊びに没頭するようになった。ピーチ姫(自分)とマリオ(父)とがキスしたり、マリオにお尻をめくられては大騒ぎしたり、一緒に寝ては気持ち悪がったりして戯れていた。

その中で、自分の空想や願望が満足されていく様子であった。さらに「おむつ」も心理療法士に見せて、母に買ってもらったと得意気に語るのだった。父への接近も増し、バトミントンなどのスポーツを通して「お父さん大好き」と言うまでになった。学校では体育の時間には着替えができるほどになった。しかし、この頃一時期学校に連れていくと、校内には入れても教室の中に入らないで母と離れたがらなかつたり、個人療法でも心理療法士と面接している間、母にそばにいてもらいたがり、室内から外にいる母の姿を見ては確認して安心するという再接近期危機を思わせる状況が起こってきた。

母に家系図を作成してもらった中で、双方の家系内の人間模様が次第に明らかになってきた。それによると、母系では、子どもはいつまでも甘えていたいものだ、だから何か困ったことがあったらいつでも世話をしてやるという生活信条を代々両親が子どもに対して持ち続けていたという。それに対して父系は、親子、兄弟関係が敵対的になり、心にゆとりがなく温かさに欠けるというのだった。祖父は再婚で異母兄弟同志が対立し、家督相続を巡ってもめ、結局祖父は生前に父に財産贈与を決めたが、祖父の死後家系内の兄弟葛藤が一挙に噴出してきたという。父も自分に忠実で信頼のおける子どもに遺産を継がせたいという思いが強く、結局のところ自分の思いどおりになるのは金しかなく、そのため貯蓄に関心が強くなっていったという。祖父は自分で家計簿をつけるほどのしっかり者で儉約家だったが、このような祖父の影響を自分に見てとれると父は家族面接の中で内省的に語るまでになってきた。

(第27～28回) T子の幼い振る舞いも次第に減少し、「自分はこんなにきれい」と誇示したり、おしゃれのために洋服を欲しがるようになった。しかし、「あんまり欲しがるのは病気じゃないか」と自分の中から沸き上がってくる解放された欲求に対する戸惑いもまだ残っていた。

(第29回) 学校で給食が食べられるようになった。「こども会の世話をするお父さんはいい父さん」

「父さんがいると楽しい。早く帰ってきてほしい」と、父の帰りを待ち侘びるまでに父に対するイメージが大きく変化してきた。

母は面接で自分の母は理屈が多く、男女平等主義で理想を追い求め、家庭的な面が乏しく、「掃除はしなくても難しいことを言ったりする人」だったという。そんな母を見て、自分は家庭や思いやりを大切にしないとと思うようになったという。しかし、自分にもそうした一面があるのか、夫から「お前は母の影響を受けている」と言われるらしい。このように両親の間でコミュニケーションが自由に行われ始め、夫婦連合はいよいよ確かなものになってきているように思われた。その影響か祖母が母の悪口を言わなくなり、母に同情的態度さえ示すようになったという。

さらに母には結婚にまつわる外傷体験があったことが語られた。最初の結婚予定の男性とは、家庭内のもめごとのあおりで結婚できず、その1年後に見合いの話が持ち上がった時に自分の母が突然不可解な自殺を遂げたというのであった。それは全く突然の出来事で今でもその理由は分からないという。結局、その相手（現在の夫）と結婚した。夫はこうした事情を知った上で、それでもいいからと結婚に至ったが、母は夫に対して強い罪悪感を持ち、結婚して5年間はそれに縛られてきた。また、結婚して1年半でT子が生まれ、その後数年間祖母が育児にいろいろ注文するため嫌で堪らなかった。それに加えてT子の生後半年の間は夫が単身赴任で不在だったため非常に心細く、一家心中も考えたことがあったという。

この回のセッションでは、T子は面接室を覗くこともなく、分離不安がかなり和らいできたことを思わせたが、実際、登校時母に学校の玄関まで送ってもらったら、それから先は自分一人で教室まで行けるようになり、再接近危機からの離脱を感じさせた。鶏のぬいぐるみを母に買ってもらい、それを使ったごっこ遊びが個人療法の中で繰り広げられるようになった。学校ではクラスの男の子への関心が高まり、好きな

男の子ができたと母に報告するようになった。

【第5期】車中面接再現期（第31回～第58回）

母の側にいるのを嫌がるようになり、自ら車中での面接を要求するようになった時期である。（第35回）この頃はまだ風呂で石鹸をつけて身体を洗い落とせず、「身がはがれるような」感覚が起こって不安になるというのだった。腋毛が生えてきたのを母に指摘してもらってとても喜んだり、水玉のブラジャーをつけて心理療法士に誇示したり、スカートをめくって下着をみせたりするようになった。

（第38回）ぬいぐるみを使って、兄弟葛藤をテーマにしたごっこ遊びが繰り広げられるようになってきた。そして弟への嫉妬を治療者に語り、カタルシスが進むにつれ、穏やかに面接が進行するようになった。

（第41回）最近、父が毎日早く仕事から帰ってくるようになった。実は母がT子のためと思って犬を飼い始めたが、それを一番喜んだのは父だったということが明らかになった。以前なら動物を不潔視していた父であったが、今は犬が一番自分の自由になる相手だという。こんなことから夫婦関係にも潤いが生まれてきた。すると祖母まで子犬を可愛がりだした。

（第42回）子どもがなぜできるかを盛んに祖母に聞いたり、大人の世界への関心が高まってきた。質問に対する母の曖昧な態度に批判的になってきた。そして以前は好きだった松田聖子の歌からテレサ・テンの歌、すなわちアイドル・ソングから大人の恋をテーマにした歌へと関心が移ってきた。また雑誌の中の性に関する記事も熱心に読むようになった。

（第44回）クラスの好きな男の子の写真を毎日大切に学校に持ち歩くようになり、そのことを女の子同志で話すのを楽しむようになった。

（第47回）学校に行った後に母を電話で呼び出すことがなくなった。しかし、医師が治療の終わりをほのめかすと「まだ、母さんに甘えたい。元の悪かった時に戻りたい。お乳を飲みたい」と母に語るのだった。

（第49回）母は「私の気持ちが一番変わりました」

とうれしそうに今の心境を語り、今の娘は幼い自分と年齢相応な自分との2役演じているように思えると表現した。

(第50回) T子は「犬の散歩はお父さんが一緒にいた方が楽しい」と語るほどに父との交流は安定し、入浴もほとんど抵抗がなくなり、母と一緒に入って石鹸で身体を洗ってもらえるまでになった。

(第51回) 家で食事時、家族から学校での様子を聞かれて、何もないと答えていたが、後から母には耳打ちして、話すことはあったけどそれを言うと祖母ちゃんが心配するからと気づかひをするまでになり、祖母への思いやりまで見られるようになってきた。

(第52回) 人から指図されることに反抗的になってきた。宿題を一所懸命するなど、学習への意欲が高まってきた。中学の制服の試着も不安なくできた。

(第53回) 口紅を止め化粧にどぎつさがなくなり、表情にも落ち着きがでてきた。

(第54回) 泣いていたりしているとみんなが優しくしてくれて同情されるのが嫌になってきた。対等に扱って欲しいという欲求が強まってきた。個人療法で初めてトランプと手品を持参し、心理療法士と一緒にになってパパ抜きゲームを楽しんだ。こうして心理療法士との間でも遊びを楽しめるようになった。

(第55回) 父がいると髪を梳いておとなしく振る舞っているが、父が出勤していなくなった途端にかんしゃくを起こす。父の存在が自己コントロールの力になっていて、幼い自分の姿は父に知られたくない様子だった。

(第56回) 学校には全日参加出来るようになった。髪結もある程度やれば諦めて登校するようになった。お別れ遠足は、母が付き添うと恥ずかしいからと1人で参加した。母からみても今のこの子の姿は女の子らしいと嬉しそうに見守っておれるという。弟との関係も仲良しになって、一緒に勉強もやるようになった。母への思いやりが見られ、母の服を貰って喜ぶ。母が身につけていたりボンなどを貰って大変喜び、母の洋

服が着れたと自慢気に語るようになった。

(第58回) 卒業式でT子が歌の伴奏を1人でやり遂げた。涙も流していた。その後から小学校時代に愛用していた物とお別れするため、自分の机の周囲を片づけ始めた。髪も切ったら保存しておくと言いはじめた。

(第59回) 小学校を卒業して中学入学を直前に控えた3月30日、病院内での面接が久々に可能になった。この日のために制服の仕上がりを予定より早めてもらって、誇らしげに着てきた。治療者とも落ち着いた雰囲気話をし、今日は「テレビにでも出るような」気分で来院したと母に語っていたという。そして、中学に入ったら、「お母さんだけ病院に行ったら。自分は友達と会う方が楽しみ」だと述べ、個人療法は今回で終結した。この時、身長140cm、体重40kg。初診時の幼さはすっかり影を潜め、思春期の女の子らしさを感じさせるほどに成長していた。

【その後の経過】

中学生活を送るようになってからのT子の変化には目を見張るものがあった。女性担任を気に入って、学習発表の時は我先にと発表して自分の存在を認めてもらいたがったり、同じ学級の登校拒否気味の女子生徒との間で交換日記を始めるなど、同性との親密な関係も育ち始めた。

自宅では自室で着替えている時父の入室を拒否するなど恥じらいも生まれてきた。ごみへのとらわれはすっかり消失し、入浴中洗い水を捨てても平気になった。そして自分の欲しい物を小遣いで自由に買えるようになった。このようにそれまで母に何でも指示してもらわないと行動がとれなかったT子がすっかり自分の判断で自由に振る舞えるようになった。母はT子の交友関係をみているとその中に入れられないような雰囲気さえ感じると嬉しそうに語り、自分の娘の成長した姿を「幼児期からの発達過程をもう一度繰り返しているみたいだと思う」と表現するのだった。小学6年の時に書いた作文が「ヒヨコからセーラー服を来た女性に変身する」内容だったが、それはまさに現実そのものだった。

真面目に勉強に取り組むT子の姿に学級仲間

も一目置くようになって彼女の自己評価も高まってきたのか、授業中以前のように我先にと手を挙げて目立ちたがる姿が影を潜め、T子自身の内的世界が次第に深まっていく様子が感じられてきた。それまで理想化していた担任を見る目も変わり、自分たちへの扱い方が平等でないといって他児と同じように批判的な態度がとれるようになってきた。

夏休みに入ると、それまでの攻撃的だった弟とも仲良しになり、盆休みには弟とふたりだけで親戚に行き、姉らしく振る舞いたい様子だった。

このように中学生として着実な歩みを示し、同性仲間との関係も深まり安定してきたことから、母子の分離にほとんど問題はなくなったと判断し、治療を終結した。

その後は夏と冬に母から葉書が毎年届くが、高校2年の現在まで順調な経過をたどって元気な生活を送っているという。なお、治療終結後の中学2年(14歳)時、T子は初潮を迎えていた。

IV. 考 察

1. 臨床診断について

本症例の初診時の病態を症候学的にみると、ごみの収集癖という強迫現象が主症状であり、症状が生活全般にわたって支配し制縛状態を呈していた。そしてT子は強迫症状でもって家族を巻き込み、家族全体が大混乱に陥っていることが特徴的であった。しかし、精神病的水準の病態を疑わせる症状は認められず、現実検討能力はよく保たれていた。よって、本症例は神経症水準の強迫現象を呈した病態と判断することができる。

2. 発症のメカニズム

1) 幼児期の問題

乳幼児期の離乳の遅れ、強い人見知りなど口愛期の母子分離にまつわる問題を強く感じさせる。夜驚、登園拒否、登校拒否まで呈していることが、容易にはこの問題が解消されていない

ことを裏付けている。さらに排泄自立の遅れとトイレトレーニングにおけるある種の罪悪感と羞恥心が強かったように自律性の発達をめぐる問題も大きく関与していると思われる。

2) 家族背景

本症例の家族背景で特徴的なことのひとつは、いまだ農村集落の面影が色濃く残っている地域の家父長制の強い大家族であったことである。そこではT子の両親が家の中でほとんど発言権を持たず、共に親としての同一性の獲得に大きな困難があったことは治療経過の中でも容易に推測される。強大な力を持っていた祖父の死がT子の発症の大きな誘因であったことは病歴から明らかであるが、事実、T子は祖父の死後、祖父の再生願望を思わせるような空想的振る舞いが見られているし、祖父との強い結びつきは大切に身につけていた祖父の写っていた写真の裏に書かれていた傘マークに象徴的に示されている。恐らく祖父の死がそれまでの家族内力動のある種の均衡を大きく崩していったと考えられよう。

3) 発症時期としての前思春期心性

T子の強迫現象が出現した11歳(小学5年)のこの時期は一般的に前思春期と称されているが、事実T子は初診時まだ明らかな第二性徴を認めず、治療開始後3カ月ほど経過した頃より次第に第二性徴の到来(乳房の膨らみ)が明らかになっている。さらに小学5年になってT子は自分の中に生じてきた漠然とした内的変化に気づいていたことにもその特徴がみてとれる(第13回)。このようにこの頃のT子には第二性徴発来直前の時期に漠然とした性衝動の亢進や性への好奇心の高まりが生じてきつつあったのだが、このような娘の変化への父の戸惑いと不用意なスキンシップが彼女に強い不安を誘発したと考えられる。前思春期は身体面の生理的、内分泌的变化にともなう感覚の変化が、明らかな身体的変化に先行して出現し、衝動性の亢進、エディプス葛藤、さらに自己像の変化によってもたらされる衝撃に対して、口愛性・肛門愛性の退行した防衛が起こってくるのが特

徹的とされているが (Moor & Fine, 1990), 今回の発症はこうした前思春期という独特な心性を背景にして生じたものであることを考えておく必要がある。

4) 発症結実因子と「ごみ」の意味するもの

以上のような背景をもちながらも発症に直接結びついた要因は何であったかをさらに検討してみたい。祖父の死はこの一家の家庭内力動に非常に大きな変化を引き起こしたであろうことは先述した通りだが, それは具体的には祖母と母の関係の変化 (第14回) であり, 財産分与の問題を巡る父の兄弟間の対立 (第4期) などであった。

しかし, ここでもっとも重要なことはT子と祖父の関係にあることを忘れてはならない。先述したような強い結びつきを持っていた祖父の死による対象喪失とそれによって引き起こされた抑うつ不安をT子は空想化や打ち消しを通して懸命に防衛しようとしている。T子にとって両親がこの大家族の中でほとんど親としての同一性を獲得できないままに今日の状況に至ったがために, T子の依存対象としての役割は祖父がその大半を果たしていたのであろう。

つぎに, なぜT子の強迫症状が「ごみ」の収集癖という形をとったかを考えてみたい。T子の強い依存対象であった祖父の葬儀の際のエピソードにそれが如実に表現されている (第2回)。つまり, 強い抑うつ不安に襲われていたT子にとっては祖父の遺骨と灰は祖父の存在そのものとしてすべてが大切なものであったに違いないが, それを両親によって受け止めてもらえずその気持ちをないがしろにされたことによって, 祖父の遺骨や灰が「ごみ」に転化していき「ごみ」に象徴される身の回りの物すべてが大切な物になっていったと考えられないだろうか。小学校1年時に紛失した名札をめぐるエピソード (第2回) は紛失した物への強いこだわりと周囲の人に信頼を寄せることができないT子の心情をうかがわせ, 祖父の葬儀の際の両親に対する気持ちにも相通じるものがあるように思われる。

このように考えていくと, 今回の発症には幼

児期の依存や排泄を巡る問題の関与もさることながら, 第二性徴に伴う性衝動の高まりと身体像の変化の著しい前思春期における祖父の死によってもたらされた抑うつ不安が今回の発症の最も重要な基盤であったと考えられよう。ただ前節で述べたこの時期にT子が父から不用意に身体を触られたことは性衝動にまつわる不安を強めていったことは確かであるが, 今回の発症の結実因子と考えられるかという問題が残っている。もしもこのことが決定的な要因となっていたならば, 恐らくT子は父への不潔恐怖という形で強迫症状が発現してくるものと考えられるが, 父自身もT子の前思春期の変化に戸惑いが強く (第7回), 父なりの努力がT子にとっては不用意なスキンシップという行動で示されていた (第17回) ことから, 父子関係には近親相姦的色彩はきわめて薄かったとみてよいであろう。不潔恐怖を呈することなく「ごみ」の収集癖という症状選択をもたらしたのは, 父子関係にまつわる不安よりも祖父という依存対象の喪失によって生じた抑うつ不安に対する防衛の意味が大きかったからであろう。つまり, T子にとって父との関係はそれほどまでに心理的外傷体験にはなっていないとみてよい。父子関係に対する特別な治療操作をすることなく, 父子関係は良好な方向へと順調な変化をたどっていることがそれを裏付けているといえよう。

3. 治療経過からみた本症例の治療機転

治療経過の中での強迫症状の劇的な改善の決定的な契機となったのは第13回のセッションであった。この時期T子に生じていた漠然とした性衝動の亢進や性への好奇心とそれにまつわる不安が父の不用意な接近によって増強させられたことを推測させるエピソードが面接の中で語られているが, こうした不安を面接場面で安心して表現することができ, 治療者がそれを安全な形で投げ返してやったことが, 彼女の不安を和らげる結果につながっている。

Ushijima & Kobayashi (1988) は前思春期にさまざまな精神症状を呈した女兒が初潮の到来

を迎えるとともに、それらの症状が軽減ないし消失するという現象に着目し、初潮周辺症候群 perimenarache syndromeとして概念化を試みている。本症例は、治療終結時には未だ初潮を迎えていなかったが、治療経過の中で明らかのように、乳房の膨らみという明確な第二次的性徴の到来を迎えることによって、それまでの激しい攻撃衝動や不安が軽減してきていることがわかる。こうしてみると、前思春期発達の中で初潮のみならず乳房の膨らみといった第二次的性徴の明確な到来が彼らの新たな自己形成過程において極めて重要な意味をもっていることが示唆されるのである。

さらに忘れてならないのは、第3期（車中面接期）の治療展開が危機的状況にあった事態を打開せんがために一大決心してT子を病院に連れてきた母の実力行使である。このことによって母は娘のT子の治療にとことん付き合う決意をした。事実、以来母自身が自分の幼児期を回想し（第13回）、祖母に対する批判的な態度を言語化する（第14回）までになっている。母が次第に母としての同一性を獲得していく過程とみてよいが、それと呼応するかのように患児自身も新たな自己像を獲得してゆく過程で、母を取り入れの対象とみなせるようになってゆくことが示されている。

4. 治療経過からみた前思春期発達の進展の様相

治療経過の中で記載したように、本症例の治療経過は大きく5期に分けることが可能であった。つまり、治療の開始当初の第1期（治療導入期）、強迫症状の増強によって家族全体が危機的状況に陥っていった第2期（制縛期）、治療の転機となった第3期（車中面接期）、次第に症状が消退していき面接室での治療が再び可能になった第4期（治療室内面接期）、母の側にいると退行が誘発されるために自ら車中での面接を求めていった第5期（車中面接再現期）と続き治療終結に至っている。この分類は主に症状や行動面の特徴から行ったものであるが、ここで前

思春期発達の力動的側面から治療経過を再度振り返り、この時期の発達の進展の様相を明らかにしてみたい。

1) 第1期（治療導入期）

まず最初に起こってきたのは、強迫症状を通して母を独占支配したり、弟の母への依存に対して敏感になり弟への激しい攻撃に表現されている母の独占欲である。それまでの依存対象であった祖父の死後の急速な依存欲求の高まりが顕著にみられるのである。この現象の背景には祖父の死による対象喪失によって引き起こされた抑うつ不安があることは先述した通りであるが、さらに興味深いのは、第2期に明らかになっていった自分の容姿への強い劣等感や自己愛の傷つき易さが彼女の攻撃性の裏に潜んでいたことである。つまり自己愛の急速な高まりをここにみてとる必要がある。

2) 第2期（制縛期）

その後ごく一過性ではあるが、2週間ほど朝起きができなくなり、無意欲で不登校状態に陥っていることである（第9回）。それまでの強迫的防衛が緩んできたことを推測させる。この現象はそれまでの自己の対象表象や身体表象に変化が生じてきたための現象であろうが、主観的には「空しい」、状況的には「淋しい」体験を指し（牛島・福井，1980）、その後の新たな対象の再創造がもたらされる意味では見落としてはならない重要な時期である。

3) 第3期（車中面接期）

治療開始後数カ月経過し身体面でも明らかかな第二次的性徴の兆しが認められるようになってきている。乳房の成長に対して小躍りしながら反応しているT子の姿（第13回）に新しい身体像を迎え入れることができた歓喜の気持ちを感じ取ることができる。それにともなって身体に対する劣等感が少しずつ癒され、弟への嫉妬心も和らぎ一緒に遊べるようになってきている。この頃には母のイメージもポジティブなものへと次第に変化してきている（第15回）。

4) 第4期（治療室内面接期）

新たな身体像や自己像の形成が急速に進展し

てゆくが、その際に重要な役割を担っているのが遊戯療法の中で用いられた人形であり、自宅で可愛がる「コッコ(鶏)」などの過渡対象(牛島, 1989)である。T子の性への強い関心が過渡対象を通して遊戯療法という現実と空想の中間領域(Grolnick & Barkin, 1978)で伸び伸びと治療者の関与のもとで繰り広げられている。それまで前思春期の衝動性の亢進などに圧倒され罪悪感さえいだき、安心して自分を表出することができず強迫的防衛に身を置いていたのであるが、このようにして自己が解放され、治療者によって受け止められ、安全な形で投げ返されることによって新たな自己像の創造がなされていくのであろう(牛島, 1990)。第二次性徴の到来を歓喜のもとに迎えたT子が、生理用ナプキンをもつて母からもらって得意がるのだが、それを「おしめ」と表現し月経と排泄を混同しているが、ここにも彼女の性への直接的表現を控えた防衛的態度を見て取ることができよう。いまだ幼児的色彩の濃い状態である。しかし、そのことによって彼女は性に対する好奇心を安全な形で膨らませることができたともいえる。

その後父に対する態度の変化が強まってくる(第19-24回, 第29回)のだが、この現象は父親の理想化(牛島・福井, 1980)といえるものである。このようにして着実にT子の世界は変化を遂げていき、社会性の広がりが見られていくが、この時期登校はしても教室内に入れなかったり、面接場面でも母のそばから離れられず、母の存在を確認しては安心して遊ぶ光景が出現している。第2の分離個体化の現象の中でみられる再接近危機といえる状況である(Mahler, 1975)。母への依存とそれからの自立をめぐるアンビバレントな心性がよく表現されている。

5) 第5期(車中面接再現期)

その後次第に自分固有の世界を創造していく第5段階に移ってゆくが、この際車中での面接を再度要求するようになったことは実に興味深い。自分の世界を車中という物理的空間を用いることによって自分の退行的側面の誘発を防いでいるわけである。きわめて積極的な行動であ

るが、この時期まだ「身がはがれるような感覚」が起こる不安感が残っていた彼女がこのような行動に駆り立てられたのはきわめて必然性の高いことであつたように思われるのである。安心して中間領域に身をまかせられることによって初めてアイドルの世界から大人の男女の切ない愛の世界を空想して楽しむことができたのかもしれない。

このようにして母子関係が安定したものに变化していくにつれ、新たな自己像の形成過程は最終段階を迎えている。おしゃれを楽しみ、母の身につけていた物を自分で身につけて喜ぶように母親を積極的に取り入れる行動へと駆り立てている。このような前思春期における自己像の破壊と再創造が確実なものになって初めて、彼女は同性同世代の仲間との交友関係が深まってくるようになるのである。

本症例にこうした経過の特徴は、小林(1991)が摂食障害ないしその近縁の障害を通して明らかにした前思春期発達の進展の様相(図1)にほぼ準じた展開がなされていることから前思春期発達固有の特徴を描き出しているいえよう。

5. 個人療法と家族面接の経過の相互の関連性について

本症例の治療構造は個人療法と家族面接を並行する形式が取られている。両者の治療展開がどのような関連でもって推移しているかをみると、興味深い事実が浮かび上がってくる。

本症例の家族内力動が祖父の死を契機に大きく変化していることは先述した通りであるが、家族面接の治療経過は両親自身がいかに親としての同一性を獲得していったかを示しているとみなすことができる。家族面接で母自身の娘に対する支持機能を高めるような治療的接近は、第3期にみられた母の一大決心によって大きな転機をもたらしている。

その後娘の好ましい変化が認められると(第13回)、母自身が自分の幼児期を回想するようになっている。その後母の家庭内での葛藤が明らかになっていくとともに(第14回)、ただ耐え忍

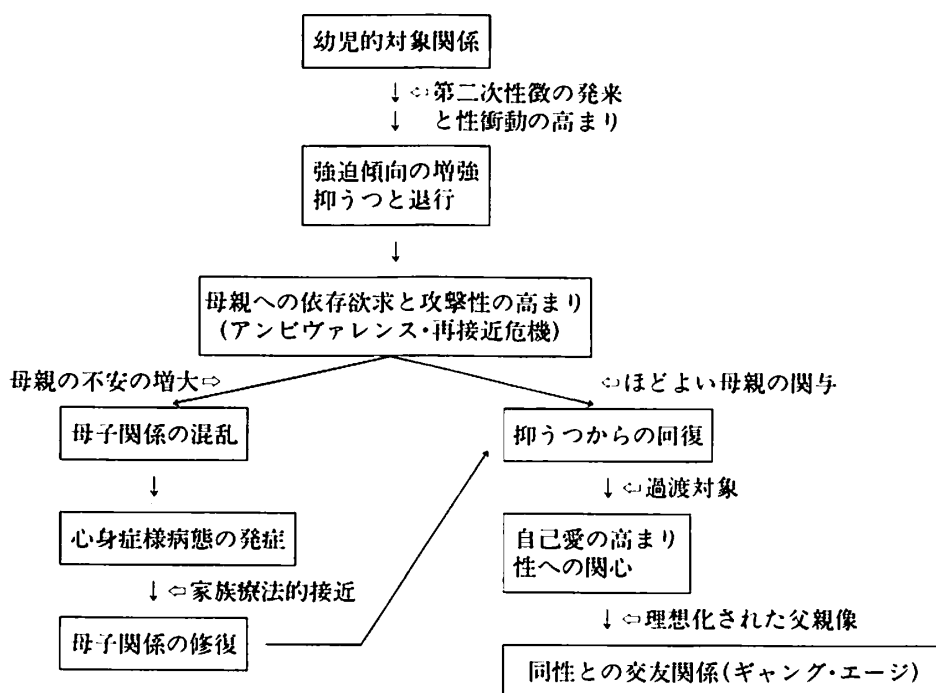


図1 前思春期発達の進展の様相 (小林, 1991)

ふだけであった母が祖母や父に対して批判的態度がとれるようになっていく。このようにして両親の間で自由なコミュニケーションが生まれていくことによって夫婦連合が形成されていくのだが、それまで娘に対してぎこちない態度しかとれなかった(第7回)父に自らの幼児期を回想する(第17回)心のゆとりが生まれ、家庭内の世代間葛藤が明らかにされる(第19~24回)とともに、世代間境界が形成され、親としての同一性が確かなものになっていっている。両親間の葛藤にはあまりにもドラマチックな外傷体験さえ秘められていたこと(第29回)もその後明らかになっている。

そして、興味をそそるのは、第5期T子が自分固有な世界を創造していくようになると、母が娘のために飼い始めた犬を父と祖母が一番可愛がるようになったという事実である。世代間葛藤からある程度解放された2人が過渡対象と戯れることによってひとり楽しむ世界を持つことができるようになっていっているのである。これを見ると本症例の治療はT子自身のみならず家族

システムそのものをも変えるという波及効果をもたらしているのである。そうしてみると、前思春期といういまだ依存的で親を通して世界とつながっている度合いが強いこの時期には家族全体を視野に入れた治療的工夫をすることがいかに重要かつ有効な方法であるかを本症例は教えてくれているのである。すなわち、この時期の子どもは親の不安によって自らの不安が引き起こされるが、親の心理的安定がもたらされると比較的容易に子ども自身の成長がもたらされるという特徴をもっているといえることができる。

V. おわりに

前思春期は思春期・青年期の疾風怒濤と対比されて突発的な変化のない時期(Sullivan, 1953)とされてきたが、昨今では心身の発達のずれの増大がこの時期に深刻な精神病理現象を生みやすくしている。この時期の治療的対応の成否いかんによっては、問題が尾を引きずり思春期・青年期のより深刻な病理をもたらす可能性(Ushijima, 1988; 牛島, 1991)を考えると、いまだ

親を通して世界と関係をもつことが多いこの時期の精神病理現象に対する家族全体を視野に入れた治療的接近の工夫は, 子どもと家族の健全な成長を願う意味からも重要かつ有効な方法であることを本症例はよく教えてくれている。

なお, 症例報告の掲載にあたって了解いただいた患児のご家族にお礼申し上げます。症例の記載にあたっては患児およびその家族のプライバシー保護の意味から本論の主旨に問題のない範囲で多少の修正を行っていることをお断りします。

本論の一部は第29回日本児童青年精神医学会総会(1988, 10, 21-22 福岡市)の症例検討の場にて発表したが, その際忌憚のない意見を多々いただいたコメンテーター小倉清先生(関東中央病院精神科)に厚くお礼申し上げます。また, 福岡大学医学部精神医学教室在局中, 前思春期症例について多くの示唆をいただいた牛島定信教授(現東京慈恵会医科大学精神科)に深謝致します。

文 献

- Blos, P. (1962): *On Adolescence*. New York: Free Press. (野沢栄司訳 (1971): 青年期の精神医学, : 誠信書房.)
- Grolnick, S. A. & Barkin, L. (eds.) (1978): *Between reality and phantasy*. New York, Jason Aronson.
- 郭 麗月, 川田素子(1983): 前思春期的人格発達とその障害. 清水将之・村上靖彦編: 青年の精神病理 3, : 弘文堂.
- 笠原 嘉 (1976): 今日の青年期精神病理像. 笠原 嘉, 清水将之, 伊藤克彦編: 青年の精神病理 1, : 弘文堂.
- 北村陽英 (1991): 中学生の精神保健, : 日本評論社.
- 小林隆児, 今地智子(1981): 前思春期における抑うつの意味—小児うつ病の前思春期発症例を通して, 児童精神医学とその近接領域, 22, 113-124.
- 小林隆児, 牛島定信 (1989a): 前思春期発達をめぐる母親の葛藤—摂食障害の治療を通じて, 家族療法研究, 6, 11-18.
- 小林隆児, 牛島定信 (1989b): ある女性アイドル歌手の自殺を契機に抑うつ状態を呈した11歳女児の1例—前思春期の情緒発達に焦点を当てて, 精神科治療学, 4, 1295-1302.
- 小林隆児(1991): 前思春期にみられる摂食障害とその近接の病態. 小児の精神と神経, 31, 19-26.
- Mahler, M. S., Pine, F. & Bergman, A. (1975): *The psychological birth of the human infant*. New York, Basic Books. (高橋雅士, 織田正義, 浜畑紀訳 (1981): 乳幼児の心理的誕生, : 黎明書房.)
- Moor, B. F. & Fine, B. D. (eds.) (1990): *Psychoanalytic terms and concepts*. New Haven, American Psychoanalytic Association and Yale University Press.
- Sullivan, H. S. (1953): *Conceptions of modern psychiatry*. New York: Norton & Company. (中井久夫, 山口 隆訳 (1976): 現代精神医学の概念, : みすず書房.)
- Ushijima, S. (1988): Preadolescence and borderline patient. *Japanese Journal of Psychiatry and Neurology*, 42, 23-33.
- 牛島定信 (1988): 思春期の対象関係論, : 金剛出版.
- 牛島定信(1989): 前思春期ドルドラムス, 青年心理, 78, 62-64.
- 牛島定信(1990): 精神科臨床における家族療法, 家族療法研究, 7, 50-58.
- 牛島定信 (1991): 境界例の臨床, : 金剛出版.
- 牛島定信, 福井 敏(1980): 対象関係からみた最近の青年の精神病理, (小此木啓吾編: 青年の精神病理 2, : 弘文堂.)
- Ushijima, S. & Kobayashi, R. (1988): The perimenarche syndrome (A proposal). *Japanese Journal of Psychiatry and Neurology*, 42, 209-216.

**PRE-ADOLESCENT DEVELOPMENT AS SEEN
IN THE RECOVERY PROCESS OF AN OBSESSIVE GIRL**

Ryuji KOBAYASHI

Faculty of Education, Oita University

Yoko SARADA

Department of Pshchiatry, Fukuoka University School of Medicine

We used psychotherapy to investigate the pre-adolescent developmental process of an 11-year-old girl who suffered from the obsession to collect dust. Both individual and family therapy revealed factors that were disturbing her emotional development. The onset of her obsession came just after her grandfather, the patriarch of the family, died. His death is considered to have affected the family's psychodynamics. She and her grandfather had had such a strong emotional tie that her obsessive action is believed to have been a defense against depressive anxiety over object loss. Because of the patriarchal structure of the

family, her father and mother had difficulties in acquiring parental identities. Therapy showed that her emotional development during the pre-adolescent stage progressed with her parents' formation of parental identities.

Author's Address:

R. Kobayashi, M. D.
Faculty of Education,
Oita University,
700 Dannoharu, Oaza,
Oita city, Oita-ken,
870-11, JAPAN